

# 「地球市民」のための環境学習のあり方

## —学生からの報告—

太田みゆき, 川村尚孝, 関澤裕子, 鳥谷部昌子  
東京国際大学下羽ゼミ4年

### A Report on Environmental Learning for "Global Citizen" from the View Point of Students' Experience

Miyuki OTA, Naotaka KAWAMURA, Yuko SEKIZAWA, Masako TORIYABE  
Tokyo International University  
(受理日1997年8月28日)

#### 1. 環境学習の方法と活動内容

私たちの研究・学習は、とりわけ環境問題を中心に他の諸問題との関連の上で進められてきた。主な研究活動としては、本ゼミとサブゼミ、大学祭（秋霞祭）での研究発表、現場体験学習、そしてキャンパスエコロジー活動の4つが挙げられる。これらの研究活動の大きな特徴は、それぞれが互いに相関連しながら、そしてそれが4年間継続されることで、大きな学習効果を生み出しているところにある。

- (1) 本ゼミ、サブゼミ：本ゼミでは、多種多様なテキストをもとに、実際の問題と照らし合わせながら、国際社会における地球的諸問題を紐解くための主要な国際理論を学んでいる。授業形態としては、毎回2名の学生が議長になり、彼らを中心とした学生主体の討論形式で進められる。このような授業形態を通して、自分の意見を持つことやそれを相手に伝える訓練ができ、また、原則として毎回レポートを提出するようになっていて、書く力を養うことができる。
- (2) 大学祭での研究発表：これまでの環境問題に関する一連の研究において私たちは、問題を生み出す構造とそれに関わる政治主体、そして問題解決への政策決定過程はどうなってい

るのか、その中で私たち市民は何ができるのかを考えてきた。私たちはこうした研究を通して、「私たち市民は決して無力な存在ではなく、社会変革の可能性を持った主体である」ことを強く実感することができた。

- (3) 現場体験学習：この現場体験学習は、実に大きな刺激を私たちに与えてくれる。本ゼミで学んだ理論や大学祭での研究発表で学んだことを現場の状況と照らし合わせることで、現実の社会構造をより深く正確に理解することができ、同時に諸問題と私たちのライフスタイルとのつながりを実感することができる。この体験から、自分自身の職業選択に大きな影響を受けた学生も少なくない。
- (4) キャンパスエコロジー活動：これまでの3つのゼミ活動(1)(2)(3)によって、国内外の社会の諸問題と私たちのライフスタイルとのつながりを実感した私たちの次なる目標は、実際に問題解決に向けて足元から行動することである。私たち学生にとって、もっとも身近な場である学内でのキャンパスエコロジー活動は、既に92年度から始められている。しかし、エコロジー活動といっても、なにも環境保全活動だけを指しているわけではない。「豊かなキャンパスライフ」を目指している私たちにとっては、私たちが生活するキャン

パスで起きている問題のすべてが、その取り組みの対象となる。

## 2. 今年度の活動内容—CO<sub>2</sub>削減に向けて—

### (1) これまでの研究活動とのつながり

これまでの本ゼミやサブゼミ、また92年度から始まった大学祭での共同研究や国内外での現場体験学習を通じて得た「共感を伴った知的分析」を基に、97年度は前年度の共同研究（原発問題から私たちのライフスタイルを考える）の成果を踏まえて、廃棄物問題を取り上げる。ちなみに、大学内では地球温暖化・CO<sub>2</sub>問題という視点も加えて、学内での「1%節電運動」、「ごみ削減運動」、「CO<sub>2</sub>削減運動」を実施し、その成果を11月の大学祭で発表する。地球温暖化を含む環境問題に対して、私たちは社会を構成する一員として足元からできることを実践する。

### (2) 地球温暖化防止のために私たちは何ができるか—具体的な運動内容—

「1%節電運動」と「ごみ削減運動」を学内で展開する。

①学内調査・・・ごみ班：学内のごみの量、分別状況、ごみ処理のルート及びコスト等を調査

電気班：学内の電気使用量とその料金、大学施設内の電気の無駄を調査、及び川越市の「1%節電運動」の実態調査

②環境問題について学生に対する意識調査の実施とビラ・ポスター等による呼びかけ

③実際に活動・・・ごみ班：まずはごみの分別を徹底し、次にごみ削減の具体案を提示し、ごみの削減への協力を関係者に呼びかける

電気班：1%という目標を

設定し、節約のための具体案を策定して関係者に協力を呼びかける

④以上の運動の成果を掲示板などで学生に随時報告する

### (3) 今年度の共同研究の意義と目的

私たちが学内で行うこれらの運動は、地球温暖化の原因であるCO<sub>2</sub>を削減するのはもちろんのこと、危険性が指摘される原発の増設を押し進める日本のエネルギー政策を問うものでもある。また、ごみの最終処分場を巡る各地域での紛争解決やダイオキシンの削減へ向けた、小さくとも重要な一歩でもある。つまり、私たちの狙いは、それらの運動を通して私たちのライフスタイルの根底にある「大量生産・大量消費・大量廃棄」という経済・社会システムにメスを入れ、その同じ根から派生している全ての問題に「生活者の視点」から対処しようとするところにある。環境問題は私たちの生活に関わる問題の一つではない。本当の意味でよりよい生活を送るためには、温暖化問題にしる、ごみ問題にしる、どの問題にしても結局自分たちの生活と密接に関連している以上、自分の身の回りを地球的規模の視点で見つめ、足元からそれを変えていくことが求められる。

また、これらの運動は環境問題を解決してだけでなく、大学をも変える、つまり「大学改革」にもつながることも想定している。この運動が成功すれば、学生自身の自信となり、「私たちは無力な存在ではない。やればできるのだ」という思いがこれまでの学生の受動的態度を変え、自分たちの手で大学を動かしていこうという意欲を高めるきっかけとなるのではないか。さらに、社会の中の大学として、私たちの取り組みが地域や内外の大学へ波及効果をもたらしていくことも期待できる。その意味で大学は、私たちにとってまさに「実践の場」であると同時に「発信の場」ともなっている。

### 3. 環境学習の成果

太田みゆき：「私たちは真の意味での豊かな生活を送っているのだろうか？」これが私の3年間の一貫した問題意識であったと思う。特に、3年生の春に行った香川県豊島（産業廃棄物問題）での現場体験学習は、この問題意識に「No!」という答えを投げかけてくれたものとして、生涯忘れることのできない経験になった。またこの現場体験学習は、4年生の職業選択にも大きな影響を及ぼしてくれた。「豊かな社会の形成に貢献したい」そんな思いから、私はそれを達成させるための職業として、新聞記者という道を選んだ。新聞記者への道は決して簡単なものではないだろうが、しかしこれからの長い人生、「豊かな生活」を永遠のテーマにして生きていきたいと思う。

川村尚孝：私は、1年次から当ゼミに所属していたが、非常に消極的な学生で出席しても発言することはほとんどなかった。しかし、96年春・夏に故郷の福井で行なった原発問題に関する現場体験学習は、自分と社会とが密接に関係すること、社会の抱える問題を解決しなければ自分も豊かになれないことを強く意識させた。その後、私はゼミ活動に真剣に取り組むようになった。本ゼミとサブゼミ、秋霞祭では、原発問題の構造を分析することで、他のごみ問題などにも通じる社会構造の一端を理解できた。さらに、その社会を足元から変革するために、大学でのキャンパスエコロジー活動を、中心になって進めている。私はゼミで、

①問題の認識

②原因の理解

③解決策の提示と実践

という「市民」に求められる能力を養うことができたと思っている。

関澤裕子：多岐にわたるゼミ活動の中でも、本ゼミや大学祭での共同研究を通じて国際・国内問題をより分かりやすく見るための“メガネ”や“頭”を養うことができた。これに加えて国内外に及ぶ現場体験学習が“頭”によるものだけでな

く“心”や“共感”を伴った理解へと成長させることができた。そして最後に“足”を使った地道な行動を今年の学内運動で身に付けたいと考えている。つまり、これまでのゼミ活動を通して“頭・心・足”の3つをもって問題をとらえ、解決することの大切さを学んだ。そして何よりも、社会と私の生活が確実につながっていること、だからこそ自分の生活や自分自身というものを見つめ直し、変えていくことの重要性を実感することができた。「私は決して無力な存在ではない。むしろ変革の主体なのだ」という強い気持ちがこれまでの、そしてこれからの生きる私にとって大きな自信となっている。

鳥谷部昌子：私は今、自分がこれからどういう生き方をしていきたいのかと考えたとき、その自己実現ということと社会の変革のひとつの主体でありたいということとは、切り離して考えられなくなった。ここにゼミでの学びを通しての私の変化がある。ゼミでの学びは頭・心・身体をとおして問題と自分とのつながりを実感できるものであり、社会の諸問題に対して私自身を起点に捉える、という姿勢を身に付けさせてくれた。またゼミでの活動の中には様々な人々との交流があり、そこから私は多くを学んだ。人との交流から私は自信を与えられ、そして自分自身と社会との接点を見だしていった。生きていくための学びに出会えたのだ。将来教職に就き、私なりの生き方を社会の変革のなかで実践していきたいと考えている。

#### 参考文献

東京国際大学下羽ゼミナールⅠ～Ⅳ, 1994『未来への発信／学生の環境問題報告—国際協力のあり方とNGOの役割』くろうじん出版事務所。

関澤裕子・鳥谷部昌子, 1997「“熱い町”・巻の原発住民投票—下羽ゼミ・現場体験学習から学んだこと①」『ひと』No. 289 (1997年2月号) 太郎次郎社, 「巻町, 原発住民投票のその後—下羽ゼミ・現場体験学習から学んだこと②」同誌No. 290 (1997年3月号)。

川村尚孝, 1997「“原発城下町” 敦賀のクールで

ホットな人たちー原発無関心派・福井出身のほく  
を変えたもの」同誌No292（1997年5月号）。

太田みゆき,1997「真の平和を目指してー現地  
学習を通して科学と市民のあり方を考える」『世  
界と議会』No.402（1997年4月号）尾崎行雄財  
団。